● 研究室紹介

琉球大学工学部土木工学科
交通・計画研究室

上間　清

はじめに

琉球大学は米軍政下の昭和25年，県下初の大学として旧王城跡（首里）に創立された．布令大学，琉球政府立大学と，戦後沖縄政治の変遷の過程でいく度かその管理母体を変え，国立大学となったのは沖縄施政権返還が実現した昭和47年5月のことであった．土木工学科は先行の機械工学科に次いで，工学系としては比較的早期に昭和32年に設立された．農家政工学部，理工学部とその所属学部が変遷し，宿願の工学部が分離独立しその所属となったのは，昭和53年，現千原キャンパスへ学部移転が実現したときのことである．現在工学部は，機械・エネルギー機械・土木・建設・電気・電子情報の6学科から構成され，学生入学定員は300名である．土木工学科は現在，構造工学，交通・橋梁，水工学，土質・衛生の4講座に，臨増に伴う半講座が加わり4.5講座を有している．助手以上定員13名から構成されている．交通・橋梁，土質・衛生は複合学科となっており，その解消・講座整備は宿年の懸案であるが，昨今の厳しい人事行政のなか，実現に及んでいない．現在，海洋環境開発工学科を設立すべく学内計画機関に働きかけているところである．

交通・計画研究室

交通・橋梁講座は人的構成1：1：1の複合講座であり，当研究室はその中の単人（ワンマン）研究室である．地方にあっても土木計画課題は多く，計画講座の独立，人員増の宿願をもっているが，近い将来の実現の目途は立っていない．大学院修士課程（建設工学研究科）発足（昭和60年）以来，土木の卒者も毎年1～2名の進学者をみているが，現在当研究室への配属はない．卒業研究の4年次学生は4～5名配属されるが，希望学生はかなり多い．以前はアスファルト混合物の実験も実施していたが，実験室競合，狭隘のため今は実施していない．野外における調査・観測を中心とした資料収集を行っている．

卒業研究の学生らには，いづこなりの論文募集をみつけては，煽動して応募させるようにしている．これまで交通安全問題，道路交通運用，建設業の未来像等で入選，佳作があり，ささやかなヒットもあった．今後も煽動したいと思っている．

研究活動

研究テーマは大別して交通現象と交通を主とした地域土木史に関心を寄せ研究を進めている．県内に土木計画分野の研究者が他になく，間断なく惹起する地域土木計画課題に対応の要を痛感しつつも諸般の限界の中，上記の2分野を中心に活動している．

現在関心をもって考察を進めている課題を次に示す．

① 道路網計画――その現状評価と網形成過程
② 交通容量算定各手法の実証比較と地域条件
③ 島嶼条件と航空ネットワーク形成
④ 地域交通史――国道58号の交通史
　　――沖縄地域旧道網形成史
⑤ 旧・名橋「眞玉橋」の「復元」と道路計画

当学科には毎年，県外非常勤講師として他大学から教官を招聘し，教官不足によるカリキュラム遂行の隘路を補っている．計画系講義のためこれまでに招聘した先生方には故・小川博三博士（北大），渡辺新三博士（当時名工大），松本嘉司博士（東京大），五十嵐日出夫博士（北大），鈴木忠義博士（東京農大）など個性豊かな先生方がおられ，職員・学生に多大なご教示を頂いた．

地方の大学にとって招聘活動は貴重な文化交流であり可能な限り予算を獲得し継続に努めたいと考えている．

おわりに

後発県沖縄であるが故に，施政権復帰（47年）後やっと本格化した計画行政の導入に伴ってあらゆる分野の計画樹立が早急に求められてきた．第一次振興開発の10年間は特に計画・調査のラッシュの感があった．交通計画，都市計画関連では特にその傾向が強く，著者へのリクエストが継続し，困惑しつつも，「社会的責任」上つとめて対応しているところである．沖縄県都市モノレール，交通方法変更問題，中南部パーソントリップ調査，新石垣空港問題への参画は貴重な体験であった．

本年は第11回計画学研究委員会研究発表会が沖縄県で開催されることとなり，地元の関係者の関心も高まっている．全国の計画研究者が，このわが国南端の地に集って頂くことは栄誉なことであり，沖縄へのご関心の高揚と，地域計画上の忌憚のないご意見を頂けることは，21世紀へ向けて地域開発のありかたを模索している当県にとってきわめて意義深いものと思う次第である．